

平成 25 年 7 月の熱中症による救急搬送の状況

平成 25 年 7 月の熱中症による全国の救急搬送の状況（確定値）
を取りまとめましたので、その概要を公表します。

概 要

- 平成 25 年 7 月の全国における熱中症による救急搬送人員は 23,699 人でした。これは当庁の調査開始（平成 20 年）以来、7 月では過去最多であり、月単位としても、平成 22 年 8 月の 28,448 人に次ぐ 2 番目となっています。
- 熱中症による救急搬送人員の年齢区分をみると、高齢者（65 歳以上）が 11,420 人と最も多く、次いで成人（18 歳以上 65 歳未満）8,761 人、少年（7 歳以上 18 歳未満）3,337 人、乳幼児（生後 28 日以上 7 歳未満）177 人の順となっています。
- 熱中症により搬送された医療機関での初診時における傷病程度をみると、軽症が最も多く 14,671 人、次いで中等症 8,093 人、重症 644 人、死亡 27 人の順となっています。
- 都道府県別人口 10 万人当たりの熱中症搬送人員は、大分県が最も多く 30.00 人であり、次いで和歌山県 28.94 人、高知県 28.65 人の順となっています。
- 消防庁では、国民へ熱中症に対する注意を呼びかけるとともに、下記の HP で熱中症に関する情報及び毎週、熱中症による救急搬送状況の速報値を提供しています。

消防庁熱中症情報

http://www.fdma.go.jp/neuter/topics/fieldList9_2.html

【資料】

[平成25年7月の熱中症による救急搬送状況](#)



（連絡先）

消防庁救急企画室

担当：日野原・伊藤・大迫

電 話：03-5253-7529

FAX：03-5253-7539

平成 25 年 7 月の熱中症による救急搬送状況（確定値）の概要

平成25年7月中の熱中症による救急搬送状況について調査を行ったところ、その概要は以下のとおりでした。

1 総数

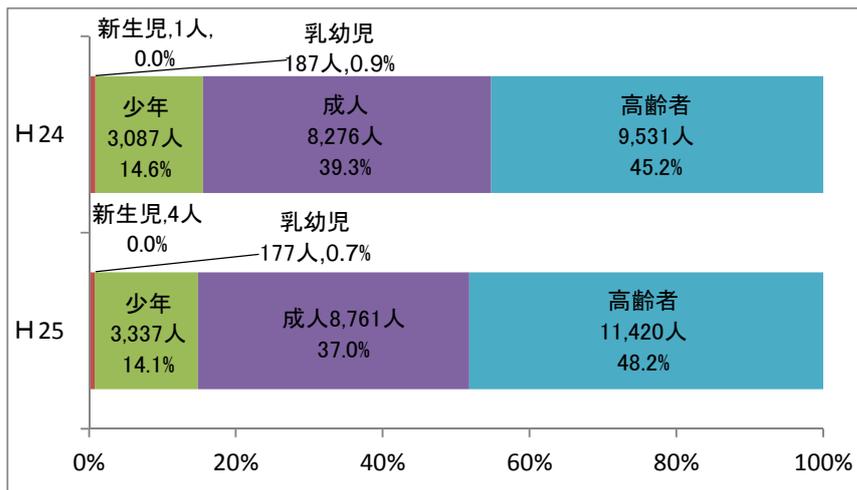
平成 25 年 7 月の全国における熱中症による救急搬送人員は 23,699 人でした。

これは、平成 24 年 7 月の熱中症による救急搬送人員 21,082 人と比べて、1.1 倍となっています。（集計 1、集計 2、集計 3 参照）

2 内訳

(1) 熱中症による救急搬送人員の年齢区分をみると、高齢者（65 歳以上）が 11,420 人（48.2%）と最も多く、次いで成人（18 歳以上 65 歳未満）8,761 人（37.0%）、少年（7 歳以上 18 歳未満）3,337 人（14.1%）、乳幼児（生後 28 日以上 7 歳未満）177 人（0.7%）の順となっています。（集計 1 参照）

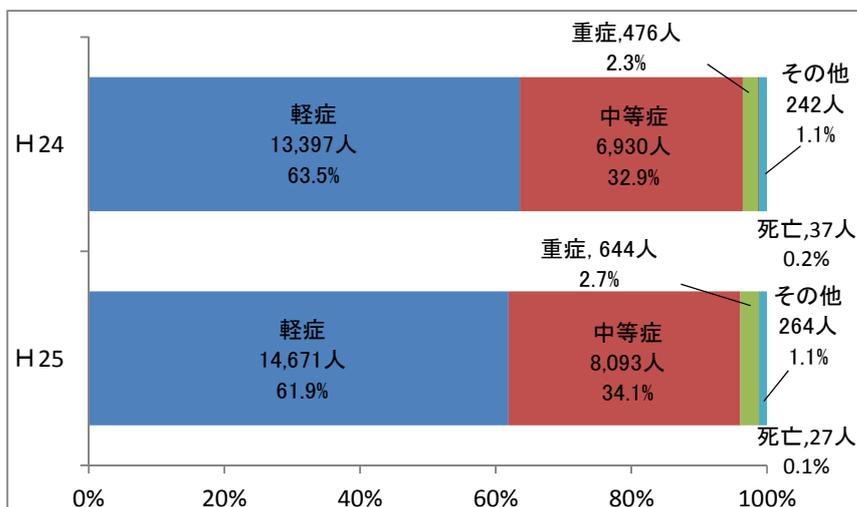
熱中症搬送人員年齢区分（構成比）



新生児：生後 28 日未満の者
 乳幼児：生後 28 日以上満 7 歳未満の者
 少年：満 7 歳以上満 18 歳未満の者
 成人：満 18 歳以上満 65 歳未満の者
 高齢者：満 65 歳以上の者

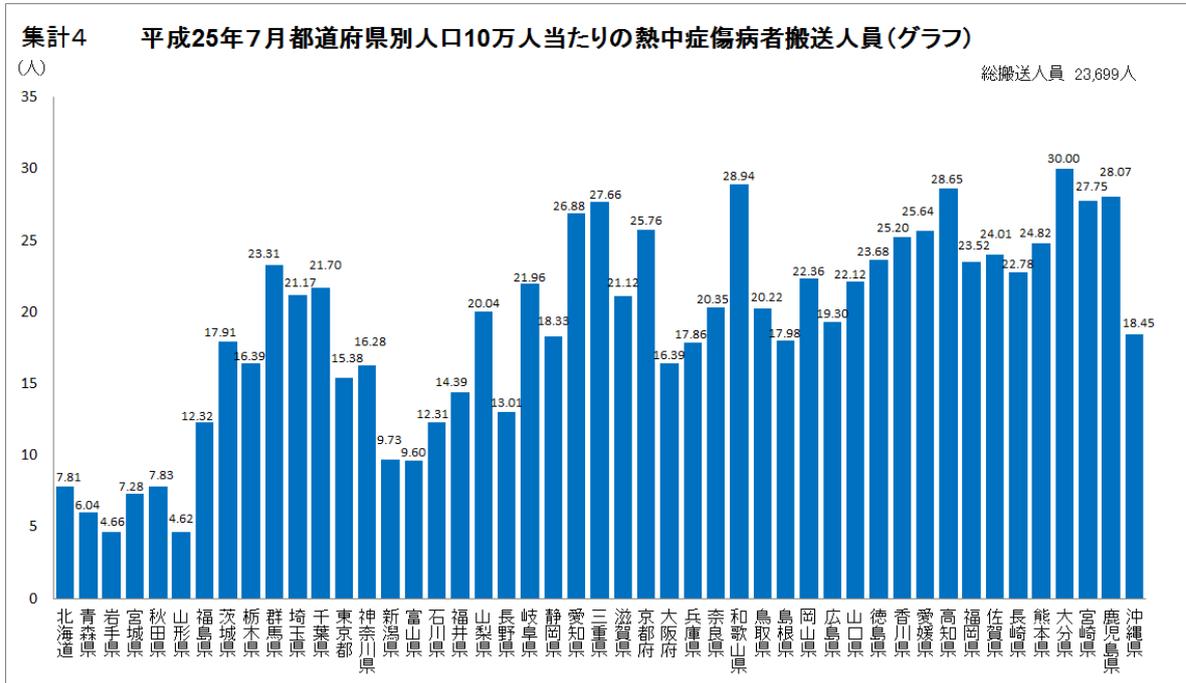
(2) 熱中症により搬送された医療機関での初診時における傷病程度をみると、軽症が最も多く 14,671 人（61.9%）、次いで中等症 8,093 人（34.1%）、重症 644 人（2.7%）、死亡 27 人（0.1%）の順となっています。（集計 1 参照）

熱中症搬送人員初診時傷病程度（構成比）



軽 症：入院を必要としないもの
 中 等 症：重症または軽症以外のもの
 重 症：3 週間の入院加療を必要とするもの以上
 死 亡：医師の初診時に死亡が確認されたもの

(3) 都道府県別人口10万人当たりの熱中症搬送人員は、大分県が最も多く30.00人であり、次いで和歌山県28.94人、高知県28.65人の順となっています。(集計4参照)



3 その他

熱中症を予防するには、暑さを避け、こまめに水分を補給し、急に暑くなる日には注意することなどが必要です。また、高齢者は温度に対する皮膚の感受性が低下し、暑さを自覚できにくくなるので、屋内においても熱中症になることがありますので注意が必要です。

消防庁では、国民へ熱中症に対する注意を呼びかけるとともに、下記のHPで熱中症に関する情報及び毎週、熱中症による救急搬送状況の速報値を提供しています。

消防庁熱中症情報

http://www.fdma.go.jp/neuter/topics/fieldList9_2.html

参考（気象庁「7月の天候」より）

月を通して梅雨前線が日本海から東北地方に停滞することが多く、太平洋高気圧は西日本を中心に張り出した。このため、西日本では、晴れの日が多く、太平洋側では降水量がかなり少なかったが、月の初めと終わり頃に前線や気圧の谷の影響で曇りや雨となり、28日には山口県や島根県では局地的に記録的な豪雨となった。東日本太平洋側では、上旬の後半から中旬にかけては晴れの日が多かったが、上旬の前半と下旬は気圧の谷や前線の影響で曇りや雨となり、特に下旬は雷を伴った大雨となった所があった。北海道では北海道の東海上の高気圧に覆われて晴れの日が多く、降水量が少なかった。一方、東北地方と東日本日本海側では、曇りや雨の日が多く、梅雨前線の活動がたびたび活発化したため、大雨となった日があった。

沖縄・奄美では、太平洋高気圧に覆われて晴れの日が多く、日照時間がかかなり多く、名瀬（鹿児島県）や久米島（沖縄県）では月降水量が0mmとなるなど少雨となった。一方、八重山地方では12日～13日に台風第7号の影響で暴風雨となった。

気温は月の前半は、南からの暖かい空気の影響で全国的に高温となり、優勢な太平洋高気圧に覆われた東日本以西では強い日射の影響も加わって猛暑日となった所も多かった。西日本ではその後も高温が続き、月を通してかなりの高温となったが、北・東日本では月の後半は前線や気圧の谷の影響で晴れの日が少なく、東北地方を中心に平年を下回った所があった。沖縄・奄美では、上旬はかなりの高温となった。